

## ソ連は日中戦争にいかに関与したのか

河原地英武 平野達志 訳著  
 家近亮子 川島真 岩谷将監 修  
 日中戦争と中ソ関係 一九三七年  
 ソ連外交文書 邦訳・解題・解説



A5判 352頁  
 東京大学出版会  
 [本体 6,000円 + 税]

麻田 雅文

日中戦争は中国との不幸な歴史であるだけでなく、その後の米英との戦争の導火線になったという意味でも、日本人にとって軽視できない戦争である。しぶとく抗戦を続ける蒋介石を陰に陽に支援する米英に対し、当時の日本人は不信感を募らせた。

一方で、ソ連が日中戦争にどう関与しているのかも、当時から現在まで、日本では強い関心が寄せられて来た。最近も、盧溝橋事件の責任をコミンテルンや中国共産党に押しつける本がベストセラーになっている。日本と蒋介石を争わせて漁夫の利を得たのはスターリンと毛沢東である、というのも、陰謀論者ならずとも日本では根強い見方である。

どのような歴史観を持ち、それを世に問うのも自由だ。しかし、仮にも歴史学で論文を書き、学生にも教えるのなら

ば、確かな史料に依拠する責務がある。その点、『日中戦争と中ソ関係——一九三七年ソ連外交文書 邦訳・解題・解説』（以下では本書と略記）は、うつつつけの史料集だ。長らくこの分野をリードしてきたのは、香島明雄『中ソ外交史研究 一九三七—一九四六』（世界思想社、一九九〇年）であったが、本書により、研究の裾野が広がることは間違いない。まずは訳者と編者たちに、衷心より敬意を捧げる。

本書は、ロシアで二〇〇〇年と二〇一〇年に刊行された史料集『露中関係』のうち、日中戦争の勃発前後の史料を選び、訳出したものだ。<sup>1)</sup>中ソ関係を専門とする研究者二名が訳出し、中国の外交史や、蒋介石を専門とする中国史研究者たちが解題を付すという構成になっている。読者には、まず懇切丁寧な解題と解説から読み、冒頭の史料に戻ることを勧めたい。

日中両国の視点ばかりで語られがちなこの戦争が、いかにソ連にとって重大な関心事であったか、読み進めてゆくうちに了解されるだろう。同時に、中国がソ連という国をいかに重視していたかも分かるはずである。

解題と解説は四名の手になる。平野達志の「解題」は、本書の底本となったロシア語史料集の書誌について詳しく述べた上で、本書に所収の史料から、日中戦争勃発前後のソ連の対応を詳しく説明している。「外務人民委員部」、「全権代表」など、ソ連の外交文書を読み解くのに欠かせない特殊な用語や、ソ連の政治制度が分かりやすく解説されている。大粛清など、当時のソ連の国内情勢に目を配っているのも評価したい。

次に、日中戦争前を家近亮子、勃発後を岩谷将が分担し、中国史研究者がソ連側外交文書を解説する。家近の「一九三七年前半におけるソ連の対中、対日認識」は、戦争が勃発する前の中ソ関係、特に西安事件を考える上で示唆的である。岩谷「一九三七年後半における中国の対日方針とソ連」は、戦争勃発後の蒋介石の方針決定に、ソ連の動向がいかに作用したかを論じる。中国側に不利な戦況となったことで、蒋介石がやむなくソ連との外交に傾斜していったことが理解できる。

川島真の『蒋介石日記』から見た一九三七年ソ連外交文書』は、スタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵の「蒋介石日記」を引用しながら、彼の対ソ観の変遷を追う。家近、岩谷の解説でも、未刊行の蒋介石日記が活用されており、蒋介石の心情の変化や動向がつかみやすい。以上のように充実した解説は、本書のもう一つのセールスポイントだ。

肝心の本文も原注が訳出されているだけでなく、日本の読者のために付けられている訳注も理解を助ける。訳文もこなれており、日本語として違和感を覚えなかった。その中身はと言うと、西安事件直後の一九三七年二月初めから、スターリンが対日参戦を拒否した一九三七年二月までの、ロシア側の外交文書が訳出されている。在外公館からモスクワへの報告と、モスクワの外交官から出先への指示が多い。

もともと、編者たちも認識するように、ソ連は党が指導した国家であり、党指導者のスターリンの意向で外交が動いた。しかし彼の考えをうかがわせる史料はほとんど収録されておらず、解説も蒋介石が中心である。率直に言うと、本書を読むだけでは、外交官たちの上に君臨していたスターリンが何を考えていたのか分からない。

ただし、党政治局の決定など、党中枢の考えをうかがわせる史料も、本書にはいくつか掲載されている。評者が関心を

抱いたのは、文書二二一（一九六〇二〇六頁）の、スターリンと中国代表団の会談録である。一九三七年一月一日八日に行われたこの会談で、上海を失陥していた中国側は、ソ連の参戦と軍需物資、とりわけ飛行機の供与を懇願した。これに対し、スターリンは参戦の要求には含みを持たせつつ、中国側を激励している。スターリンの辛口な人物評と、彼一流の社交辞令も楽しめる文書である。スターリンの日記は見つからず、外交官たちに直接与えた指示も少ないことから、ソ連の最高指導者の考えを知る上では、これもまた軽視できない文書である。ほぼ休みなく日記を書き続け、手紙魔でもあった蒋介石とは対照的だ。

以上のように充実した内容を踏まえつつ、以下では評者の異見を付す。

まず、本書の書名である。日中戦争は一九三七年から一九四五年まで続いた、八年間に及ぶ戦争である。最近の中国では、一九三一年の満洲事変を起点とする、ひとくくりの戦争と教えている。そうした歴史認識の差異は置くとしても、本書が一九三七年のソ連側の史料を訳出したのみで、『日中戦争と中ソ関係』という書名を掲げたのは、「誇大広告」の感が拭えない。副題にある「一九三七年ソ連外交文書」の方が、内容により忠実である。ただ、同じタイトルで、今後も一九

三七年以降の文書を訳出してゆくのならば、評者は異を唱える者ではない。むしろ、それを強く希望する。

次に、本書の意義についてである。解題で編者は、本書の底本のロシア語史料集が「対日戦争期の中国との関係をめぐるソ連側文書に特化して編集されたロシア語圏で初めての資料集である」と位置づけている（二四六頁）。この点はその通りで、だからこそ本書のロシア語底本は、中ソ関係の研究者の必読書となってきた。

しかし、本書ではもう一つの重要なロシア語史料集が活用されていない。それは、『抗日戦争期の全連邦共産党（ボリシエヴィキ）、コミンテルンと中国共産党 一九三七年（一九四三年五月）（二〇〇七年）である。こちらは書名の通り、日中戦争下のモスクワと延安の通信や、コミンテルン内での中国情勢についての討議史料が主である。本書でも言及はされているが、訳出はされていない。

日中戦争の間、国際社会から認められた正式な政府は、中華民国国民政府であった。そのため、政府間の外交文書を訳出した本書の意義も大きいわけだが、ソ連は一九二〇年代から、北京政府、国民党、中国共産党、その他の地方政権とも同時並行で外交を行っていた（中国共産党に対しては、ほぼ「命令」であったが）。一九三〇年代も例外ではなく、ソ連は国民

政府の他にも、対中外交の複数のチャンネルを確保していた。

そうした点を踏まえると、日中戦争期のソ連の対中政策の全体像を知るには、コミンテルンや中国共産党の史料も参照されるべきだ。モスクワのもう一つの顔である、コミンテルンから中国共産党への指示も収録されていれば、ソ連の対中外交の複雑さを日本の読者に伝えられたに違いない。もっとも、政府間の外交文書に限定するのも一つの見識だろう。そのため、この点は本書の価値を損なうものではない。

ただ、ロシア語底本への高い評価とは裏腹にある、無警戒ぶりは気になった。本書が、ソ連の対中政策の中でも最重要文書を集めていると考えるなら、初心<sup>うぶ</sup>である。ソ連時代から、ロシアで刊行される史料集には、自国に都合の悪い史料や、対外関係の悪化を招きかねない史料が掲載されることは減多

にない。ソ連崩壊後、そうした傾向は弱まったとはいえ、本書の底本も、ロシア人編者に特有のバイアスがかかっていることについて、注意が喚起されても良かったのではないか。

なお、本書のロシア語底本が刊行されてから、すでに一九年の歳月が流れた。読者には、研究の最前線はさらに先へ進んでいることも留意してもらいたい。例えば、二〇一三年にインターネットで公開された、スターリンの個人文書もその一つだ<sup>③</sup>。現在はロシアとベラルーシ国内のネット上から閲覧可能で、イェール大学も「スターリン・デジタル・アーカイブ」<sup>④</sup>として販売している。また日中戦争下の政治局の決定のほとんども、モスクワのロシア国立社会政治史文書館 (РГАСПИ) で閲覧可能だ。本書に収録されていない政治局の決定も掘り下げれば、ソ連の対中政策のさらなる深淵に迫ることもでき

□新刊□

## 中国詩歌史通論

## 毛詩注疏訳注小雅(三)

田中和夫訳注

趙敏俐主編 李均洋・佐藤利行・小池一郎 日本語訳主編 《中国詩歌通史》北京人民文学出版社2012年十一月の「総序」と各巻の「緒論」を一冊にまとめた《中国詩歌史通論》の全訳。詩歌通史の基本原則、各時代における詩歌の発展特徴、漢民族の詩歌と少数民族の詩歌との繋がりなど、新たな中国詩歌観を確立した。 ■12000円

『毛詩注疏(正義)』は毛・鄭を基とする『詩経』旧注の集大成。本書はその小雅篇、卷十の二部分の訳注。西周「中興」の主とされる宣王を詠った二群の詩が現れる。 ■6000円

## 幅広いテーマにわたる三十年の研究の軌跡 中国語学・日中対照論考

楊凱栄著

一ツツをめぐってニスコイブと焦点をめぐって三数量強調をめぐって  
四全称表現をめぐって五ヴォイスをめぐって六構文の意味と構文の相違  
をめぐって七語用論をめぐって ■4600円

白帝社

※価格は税別  
〒171-0014 東京都豊島区池袋2-65-1  
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272  
http://www.hakuteisha.co.jp

るだろう。

それでもやはり、本書によって、ソ連の外交文書が手軽に日本語で読めるようになった意義は大きい。

現在は、中露の政治的接近を背景に、両国の友好関係が長らく続いてきたと主張する研究が、ロシアでも中国でも大手を振っている。日中戦争についても例外ではない。特に、大戦終結から七〇周年にあたる二〇一五年には、そうした本が両国で量産された。しかし、ソ連が中国を支援するまで紆余曲折があったことは、本書を手にとった読者はすぐに分かるはずだ。本書を参考にすることで、日本の研究者は、「中露友好史観」に惑わされず、別の見方を示すこともできる。本書を手掛かりに、さらなる未知の史料を探索して、日中戦争の研究に新しい息吹をもたらす人々が増えることを願う。

### 【注】

- (1) 底本は①で、②等でも補っている。① Русско-китайские отношения в XX веке. Т. 4: Советско-китайские отношения: 1937-1945 гг. Кн. 1: 1937-1944 гг. М., 2000. ② Русско-китайские отношения в XX в. Т. III: Советско-китайские отношения (сентябрь 1931 - сентябрь 1937 гг.). М., 2010.
- (2) ВКП(б), Коминтерн и Китай: Документы. Т. 5. ВКП(б),

Коминтерн и КПК в период антипипонской войны. 1937 - май 1943. М., 2007.

(3) «Документы Советской Эпохи» <http://sovdoc.rusarchives.ru/#main> [二〇一九年二月一七日参照]

(4) «The Stalin Digital Archive» <https://www.stalindigitalarchive.com/frontend/node/1> [二〇一九年二月一七日参照]

(あさだ・まさふみ 岩手大学)